

中論二諦について

—二諦即中道—

田 中正徳

二諦説が、仏教研究に重要な意義を持つことを、最も顕著に指摘し、仏教界に大きな波紋を投げたのは、なんと言つても、竜樹の中論頌及びその青目釈の文であろう。今まは、羅什訳中論の八不にて二諦を説明するのであるが、特に、二諦即中道と言われる点について、考察するのである。

中論掃教偈に『不生亦不滅・不常亦不斷・不一亦不異・不来亦不出・能説是因縁・善滅諸戲論・我稽首礼仏・諸説中第一』とのべ、縁起の諸法に対して、生滅断常一異来出の諸見を否定し、戲論寂滅した空觀に入る事を、真諦第一義と説くのであるが、この真諦第一義とは、縁起そのものを言うのであり、換言すれば、實在そのもので、實在が同時に真理である。そのことは、縁起は自体をもつての生起ではなく、生滅ありとする實在論的見解でもなく、不生としての縁起なのである。

中論の論理的基礎づけの順序として、中村博士は、『縁起・無自性空は定まつていて、これを逆にするにはできないと言われ、しかも、この論理的基礎づけの順序は、一方的であり可逆的でないと言われる、そして、縁起、無自性、空の三概念は、同義であるけれども、その中では縁起が根本であつて、他の二つは、縁起から導き

出されるものである』と言われる、しかるに、中論の縁起の考は、諸法の無自性、空を示さんとするに、八不の破邪によつてなされるのである、従て無自性空の理論的根拠をなすものである、だから、単に生滅に固執する有所得を否定すると言うのではなく、有所得の迷情を空すると言ひ為であるから、この否定も更に否定せられるのである。

中論第二四、觀四諦品十八偈に『衆因縁生法・我說即是無・亦為是假名・亦是中道義』とあり、青目はこれに、『衆因縁生の法、我れ即ち、これを空なりと説く、何となれば、衆縁具足し和合して、而して物生ず、是の物は衆因縁に属するが故に、自性無し、自性無きが故に空なり、空も亦復空なり、但衆生を引導せんがための故に、假名を以て説く、有と無との二辺を離るが故に、名づけて中道と為す』とのべている。この意味するところは、諸の存在は、因縁（縁起）によつて成立しているから、無自性であり、無自性であるから空であると言ひことである。単的に言えば、一切の在るものは、衆縁所生であること、衆縁所生であるから、一切の在るものは、自性がないこと、自性がないから一切の在るものは存在性がないこと、結局これが、空を立言する根拠となるのであつて、それは、衆縁所生を根拠にして、在るものから自性を否定し、自性がなきことを根拠にして、その在るものから存在性を拒否し、存在性のなきことを根拠にして、その在るもの空を立言することである。空の立言は、生滅の否定、その否定の形は、二重の否定となつて、空亦復空と説かれる。では、その生滅の否定とは、具体的に何を言うのかと言へば、中論では、四句分別のことである。中論觀因縁品第四偈に、『諸法不自生、亦不從生、不共不無因、是故知無生』とのべ、

自他共無因の四を指すのである。この事は、存在それ自からが生ずるといふ、有るべき所有の場合をあげ、それを自より他より自他の共和より無因より生ずるかの四として、これ以外に生ずると言うべき場合がないとして、更にこの四のいずれに於ても、生ずると許すことはできないと説くのである。すなわち、一切のものが、自体をもつていて、その自体によつて生起があると考えられる所見の破折であるとともに、実体があつて、その実体が現象世界に、そのまま顕れ出るとする考え。又は、その実体によつて現象世界が成り立つとする考えを打破する意味で、八不の不生、すなわち戲論寂滅をその戲論生成の根源において追求し批判したものである。

中論觀涅槃品第二十五において、涅槃は有無等の四句分別によつて、言いあらわされるべきでないといふようにのべる。

『若非有非無、名之為涅槃、此非有非無、以何而分別』『分別非有無、如是名涅槃、若有無成者、非有非無成』第十五、十六偈、そして、涅槃を説いて、『無得亦無至、不斷亦不常、不生亦不滅、是說名涅槃』第三偈、と言ひ。『涅槃與世間無有少分別。世間與涅槃、亦無少分別』『涅槃之實際、及與世間際、如是二際者、無毫釐差別』第十九、二十偈、涅槃と生死と相即無別を言ひ、又、中論觀如來品第廿二には、如來の自性と世間の自性とは、差別がないことを説き、共に無自性であるとのべる。中論觀苦品に於ては、人の世は苦なりと説くは世諦、だが第一義諦に於ては、苦もまた不可得であると言ひ、苦の、自作他作、共作、無因作を否定するのである。

中論觀法品に於ては、八不と四句を結びつけている。『諸法実相者、心行言語斷、無生亦無滅、寂滅如涅槃』『一切実非実、亦実亦非実、非実非非実、是名諸仏法』『自知不險他、寂滅無戲論、無異

無分別、是則名実相』『若法從緣生、不即不異因是故名実相、不斷亦不常、不一亦不異、不常亦不斷、是名諸世尊、教化甘露味』第七偈—十一偈、と説く、四句と八不を結びつけて、諸法実相を証している。しかるに、先にのべた、空亦復空と言ひ二重の否定も、この諸法実相を示さんとするのである。

中論觀四諦品第八偈に、『諸仏依二諦、為衆生說法、一以俗諦、二第一義諦、若人不能知、分別於二諦、則於深佛法、不知真実義』と説き、二種の諦によつて諸仏の法説があるとし、その真理が説法に用いられているとなしてゐる。諦が、真理の意味であるから理境の二諦で、対象としての理に、俗諦と真諦との二種があることにならるが、しかし二種の真理の意味ではなく、俗諦は言詮思慮の縁起の世界で、空なるべきものであつて、真諦の縁起の世界の空とは、異なるのではない。俗諦言説の中に、言教の二諦としての俗諦有と、真諦空との説き方があつて、この二諦の説き方によつて、真諦が証得されると、みなければならぬ、しかるに真諦は、言亡慮絶、俗諦を有無の説き方の言説といふことになる。それは、有所得の迷情、有見無見、斷常二見を打破するにある。

結語として、真俗二諦は、結局破邪にして八不と同一であり、その顕わさんとするところは、諸法実相なのである。従つて、二諦即中道と言われるのである。